

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Metalinguistic ability and foreign language education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1996-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 純一, Murata, Junichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1767

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



メタ言語能力と外国語教育

村 田 純 一

1. はじめに

外国語教育の目的については、従来から様々な議論が行われており、主に教養派と実用派に分かれてきたが、今日の国際化の流れの中では、コミュニケーション重視の実用派の目的論が主流と言って良いと思われる。しかしながら、翻訳機械の精度が向上し、それほど遠くない将来に、第二言語を学ぶ目的をその実用性に置くことの根拠が薄れる時代が訪れることが予想される。

一方この数十年に、バイリンガリズム（二言語併用またはその能力）やバイリンガル（二言語併用者）の研究が進み、バイリンガルには以前のような否定的な影響ではなく、肯定的な影響があることが認められるようになってきている。そしてその中でメタ言語能力が果たす役割に、特に注目が集まっている。このことは第二言語習得一般、すなわち日本における外国語教育についても、大いに関連する事は疑えない。

本論では、バイリンガリズム研究における、バイリンガルへの肯定的影響を概観し、特にメタ言語能力に焦点を当て、それが日本における英語教育の目的にどのような示唆を与えるかを、大津(1989, 1994, 1995)の提案の検討を通して探っていく。

2. バイリンガリズムと知能についての研究

近年のバイリンガリズム研究者のほぼ一致した見解によるとバイリンガリズムと知能の関係は1960年代を境として、バイリンガリズムが悪影響を与えるとした時期から良い影響を与えるとする時代への転換が見られる。前者の

時代における研究は主に方法論上に問題があったとして今日では否定的にとらえられている。たとえば Goddard (1917), Brigham (1923), Goodenough (1926) のようにアメリカへの移民の知能が劣るとした研究に対しては Hakuta (1986) がその検査方法, すなわち被検者の不慣れな言語を用いてテストを行ったことなど, に問題があることを指摘している。また Welsh と English のバイリンガルの知能をモノリンガルと比較し, モノリンガルが 10ポイント優っているという結果を示した Saer (1924) や, Smith (1923) による同様の研究に対しても, 被検者のグループの分類方法の問題や統計処理の点から否定的な見方が多い (Baker 1993, Romaine 1995)。

以上のようなバイリンガリズムが知能に悪影響があるとされた時期に続き, Jones (1959) などの, バイリンガリズムが知能に特に否定的な影響をもたらすことはないという中立的な結果を示す研究を経て, 逆にバイリンガリズムが知能に良い影響を与えるとする研究のさきがけとなるのが Peal & Lambert (1962) である。

彼らは, 上記などの先行研究における方法論上の不備な点, すなわち調査対象となるバイリンガルとモノリンガルのグループの言語上以外の因子を等質にすることに配慮し, 両者ともモンリオールに住む中流階級の両親をもつ10歳の子どもで, バイリンガルグループは両言語がほぼ同じ能力をもつ balanced バイリンガルを選んだ, またテストは IQ に基づくテストよりはより広く認知的な能力を測定するものを採用した。その結果, バイリンガルグループはモノリンガルグループよりも, 言語的な知能と言語外の知能の両者において優れていることが分かった。とくに前者が優れていたのは, 心的操作や, 視覚パターンの再構成, あるいは, 心的, 象徴的な柔軟性を要求する概念形成の作業であった。

Peal & Lambert (1962) の結果, すなわちバイリンガリズムが知能に良い影響を与えるとする主張はその後多くの研究によって支持されてきている。Liedtke and Nelson (1968) は知能発達の主要部分である概念形成にバイ

リングルが優れていることを確かめた。⁽¹⁾ Ianco-Worrall (1972) は南アフリカのバイリングルを調査し、モノリングルに比べて、物とその名前との関係が恣意的であることの認識が年齢的に早いことを結論づけた。Scott (1973) や Carringer (1974) は、バイリングルがモノリングルに比べ divergent thinking (拡散的思考) あるいは創造的思考の能力 (たとえば、ある物体の用途をできるだけ多く考えること) において優れていることを確認した。

以上のようにバイリングリズムが知能に良い影響を与えるという主張は現在では主流といって良いと考えられるが、いくつかの問題点が指摘されている。その一つは、Peal & Lambert (1962) の研究例から分かるように、バイリングルグループは balanced バイリングルに制限したことである。一口にバイリングルと言ってもその二言語の能力は様々で、balanced バイリングルはごく一部といって過言ではない。知能に良い影響が得られるのが balanced バイリングルに限られるとすると、大部分のバイリングルあるいは一般の第二言語学習者には知能上の恩恵はないことになる。事実、Cummins (1975, 1977) は balanced バイリングル、non-balanced バイリングル、モノリングルの3つのグループの認知上の発達の比較を行い、その結果、統計的有意差はなかったものの、balanced バイリングルのグループがモノリングルグループより優れていたのに対して、non-balanced グループはモノリングルグループより劣るという結果となった。このことを説明するために Cummins は threshold hypothesis (敷居仮説) をたてて、バイリングリズムが良い影響をもたらすには二段階の threshold の二段目を越える必要があるとしている。反対に一段目の threshold を越えない場合は悪影響がでるとしている。

Cummins の threshold hypothesis は多くの支持を得ているが、これに対して Diaz (1985)、Hakuta (1987) は、ほとんど正反対と思われる結果を出している。彼らはプエルトリコの幼稚園児から小学校6年の200名の子どもを対象に、3年間バイリングリズムと認知能力との関係を調べた結果、認

知上の良い影響は、むしろバイリンガリズムの発達上の初期段階で現れたとする。Diaz & Klingler (1991) の説明によると彼らの場合、Cumminsとは異なり、いわゆる、additive bilingualism (母語に第二言語が加わる形のバイリンガリズムで、母語から第二言語に移行する subtractive bilingualism と対照される) の環境にあることがこのような結果となった一因としている。いずれにしても、バイリンガリズムの発達段階と認知能力の関係にはまだ研究の余地が多く残されている。

第二の問題点は因果関係である。これは Peal & Lambert (1962) が自ら指摘していることであるが、バイリンガリズムが知能発達を促すのか、知能発達が高い子どもがバイリンガルになるのかという問題である。これはいわゆる卵と鶏の関係で今のところ未解決であるが、バイリンガリズムが知能発達を促すという見方が有力とされている (Diaz 1985)。

次に問題とされるのは、このようなバイリンガリズムの知能発達の促進が事実として、それを示す研究例から分かるように、それが幼年期における一時的な差であって、永続的なものではない可能性があることである。この点については、今後は対象として成人を含んだ長期的な研究が望まれる。

以上のような問題点はあるにしてもバイリンガリズムが知能発達を促す可能性があることは多くの研究者の一致した見解と言って良い。それではバイリンガリズムが知能発達を促す要因について以下で見えていくことにする。

3. バイリンガリズムが知能発達を促す要因

Cummins (1976) はバイリンガリズムと認知上の有利さとの関係を3つの方法で説明している。第一はバイリンガルが二言語、二文化にふれることからモノリンガルに比べて、幅広く、多様な経験を持つことによるもの、第二は言語の切り替え (code-switching) が思考の柔軟性につながるもの、そして第三は、言語の対象化 (objectification) の過程による説明である。⁽²⁾

Baker (1993) によると、この第三の説明、すなわち言語の対象化が三つの中でバイリンガリズムと認知上の有利さを説明する中心的な構成要素であろうとしている。それではここで言語の対象化あるいはメタ言語認識 (meta-linguistic awareness) について少し詳しく検討をくわえることにする。

バイリンガルが言語の対象化において優れているという点は、Leopold (1939-1949) による自分の子どものバイリンガリズム能力の発達の綿密な研究や、Vygotsky (1962) に端を発している。Vygotsky (1962) は、バイリンガリズムによって「子どもは自分の言語は多くの言語の中のひとつの特定な体系とみなし、その言語現象をより一般的なカテゴリーのもとでとらえることが可能になる。そしてそのことで自分の言語操作を認識するようになる」と示唆している。現在このような認識をメタ言語認識 (meta-linguistic awareness)、そしてその能力をメタ言語能力 (meta-linguistic abilities) と呼んで、これらに関する研究が進んできている。

これらの概念はやや曖昧に用いられているが、Tunmer & Herrinman (1984) はメタ言語認識 (meta-linguistic awareness) の大まかな定義を「単に言語体系を文章を理解したり作りだすために用いるのではなく、言語自体を思考の対象として扱い、話し言葉の構造的特徴を内省したり、操作する能力」としている。より具体的には、言語記号とそれが表す意味内容の恣意性を認識すること、言語構造への感受性、曖昧性の発見、同語反復的な文章の分析、文処理における統語的傾向、非文法的な文の訂正、言語混合の発見、言語処理の制御などがあり、いずれに対してもバイリンガルがモノリンガルよりもこのような能力において優れていることが多くの研究で確かめられてきている。

たとえば、Ianco-Worrall (1972) は4歳から9歳までの南アフリカのバイリンガルとモノリンガルを対象に、事物の名前を自由につけられるとしたら、cow を dog, dog を cow と呼べるだろうかという質問をしたところ、バイリンガルの過半数が呼べると応えたのに対して、モノリンガルで呼べると

したのは僅かであった。このことは、事物とその名前の関係が恣意的であることをバイリンガルの子どもが低年齢で気づくことを示すと結論づけている⁽³⁾。

Ben-zeev (1977) はイスラエルとアメリカ合衆国にそれぞれ住んでいるヘブライ語と英語のバイリンガル(5歳から8歳)を用いて、the Symbol Substitution Test(記号転換テスト)を行った。すなわち、Iをmacaroniに変えて文を言わせるテストで、たとえば、I am warm. という文はMacaroni am warm. となる。結果はバイリンガルが優れていることがわかり、バイリンガルが言語のスキルにおいて、柔軟かつ分析的であるとしている。

Bialystok (1986, 1987) は統語面の文法能力を比べるため4つの文の文法性を判断させた。つまり、文法的で意味も正常な文(e.g. Why is the dog barking?), 文法的だが意味的におかしな文(e.g. Why is the cat barking?), 意味は分かるが文法的でない文(e.g. Why the dog is bark-ing?), 意味的にも文法的にもおかしな文(Why the cat is barking?)を与えて、文法的に正しいものを選ぶ作業をさせ、その結果バイリンガルがモノリンガルよりも優れていることを確かめた。このことはバイリンガルが言語的な処理において選択的なコントロールの能力に優れていることを示しているとする。Bialystok (1991)はこの選択的コントロールあるいは注意をコントロールする能力とともに、言語的知識の分析能力が優れていることがメタ言語的作業に要求され、バイリンガルはその点に於いて優れていると論じている。

4. メタ言語能力が認知能力を促進する仕組み

メタ言語能力が認知能力に関係あることはすでに上で簡単に触れたがDiaz & Klingler (1991)はこの二つの関係をバイリンガルの子どもの認知発達について詳しく考察をしている。彼らは3歳から6歳の就学前のバイリンガル・プログラムに通うスペイン語と英語のバイリンガルの子どもの

code-switching と private speech について実験を行った。

この実験では三つの認知的な作業、すなわち、ブロック・デザイン（二次元のモデルに従って三次元のブロックを作る）、分類作業（関係のある物体、たとえばハンマーと釘を組み合わせる作業）、分断されたストーリーの順序を整える作業をさせ、その際の private speech（仕事の手順や計画などを言葉に出したもの）の量と質、そして、同時にどれほど code-switching（2言語間の交替、この場合は英語とスペイン語）が起こったかを調べた。

この実験の仮説としては、code-switching に関しては、バイリンガルの子どもは認知的な作業をする際にその private speech において code-switching がよく起こり、難しい作業ほど多く、その作業の成績と関係があるということであった、すなわち、code-switching がバイリンガルの認知的に良い影響を引き起こす原因かどうかを調べる目的をもっていた。結果としては、code-switching はほとんど起こらず、この仮説は否定されたとしている。

一方、private speech の量と質については、その量が多いほど、そしてその質が高いほどバイリンガルの程度が高いという仮説で、これは private speech の果たす言語による調整（verbal-mediation）がバイリンガルの認知的に良い影響を引き起こす原因かどうかを調べる目的であった。結果は有意差はでなかったものの予測通りの傾向が見られた。

以上の結果を基に、Diaz & Klingler (1991) はバイリンガルの認知的な優位性とメタ言語能力の関係について、とくに Vygotsky の理論的枠組みに沿った説明的モデルの概略を提案している。それを簡単にまとめると以下のようになる。

1. 幼児期に additive な形で二言語にふれると言語の客観的な意識につながる。
2. 言語の認知的機能の意識・理解は思考の道具としての言語使用につながり、様々な言語機能の自己制御（self-regulatory control）を

高める。

3. 認知機能のための言語使用が効率的になると言語的、非言語的認知作業において有利になり、bilingual は private speech や言語的調停が発達しているので認知的管理機能が発達させる。

彼らは自ら認めているように、このモデルはあくまで提案にすぎないということで、今後の発展が期待されるが、ある程度メタ言語能力と認知機能の関係を明らかにしていると言えよう。また外国語の目的論の中で従来から漠然と言われていた知能訓練としての役割を解きあかす研究として注目に値する。

本稿ではこれまでバイリンガリズム研究の中で明らかになっているバイリンガリズムの認知発達上に及ぼす肯定的影響とそれに関わるメタ言語能力について概観してきた。ここで簡単にまとめると以下のようなろう。

1. バイリンガリズムは認知発達上に良い影響を与える可能性が高い。ただし、それは環境によっては、balanced bilingual, すなわち二言語がバランスよく発達した場合に限られるようである。
2. その良い影響の要因としては、二言語、二文化に触れることによる経験やメタ言語能力の発達が関係している。

以下では日本の外国語教育に対してバイリンガリズム研究が指し示すと思われることを、特にその目的に焦点を当てて論じることとする。

5. 日本の外国語教育の目的

日本の外国語教育の目的について特にメタ言語能力に注目しているものに、大津（1989, 1994, 1995）があり、英語教育の中心的な目的としてメタ言語能力の発達の促進を主張している。大津（1994）では英語教育の目的の全体像を論じ、それは以下の3点に要約できるとする。

1. 外国語である英語に触れることおよび英語の運用を行うことにより、学習者が言語を含めた文化の相対性に対する認識を深めることを手助けする。
2. 外国語である英語の学習を体験することにより、学習者が母語である日本語を用いて豊かな言語活動を行うことができるようになることを手助けする。
3. メタ言語能力を利用して学習者に科学の方法を理解させる。

ここでは大津は、1と2に関連して、以下のようなプログラムを提案する。

4. 英語教育により学習者のメタ言語能力の発達を促進する。
5. 日本語と英語という二つの異なった言語体系に関するメタ言語能力を身につけさせることによって、学習者に個別言語の相対性を理解させ、さらに、より一般的に、個別文化の相対性を理解させる。
6. 個別文化の相対性を理解させた上で、学習者に異文化間伝達手段として実際に使いうる形での英語力を可能な限り養成する。

大津の議論には三つの前提があるといえる。第一に、英語教育により学習者のメタ言語能力が促進されること、第二に、メタ言語能力を身につけさせることが学習者に個別言語の相対性を理解させることにつながるという点、そして第三に、個別言語の相対性を理解させることが個別文化の相対性を理解させることにつながるということである。果たしてこれらの前提は正しいといえるのであろうか。

第一点については大津（1989）は「母語の場合と異なり、外国語は、通常、自然場面での習得ではなく、意図的な教授を通しての学習であるから、その学習の産物である外国語の知識を客体化して捉えやすいという点がある。さらに二つ以上の言語体系が得られている場合には、それらを比較対象するこ

とが可能になり、メタ言語能力が発達しやすくなる」としている。また、これに加えて、「バイリンガルがメタ言語能力の発達が一般的に早いこともその裏付けになる」としている。前半については従来から言われていることで直観的に正しいと思われるが、これを実証的に確かめた研究は今のところなく、今後の研究が待たれるが、その方法が問題で、これを確かめることは困難と思われる。後半については、すでに本論で見たように、バイリンガルがメタ言語能力を発達させるのは主に balanced バイリンガルの場合であるとする研究と、Hakuta (1987), Diaz (1985) のように additive bilingualism の状況ではバイリンガリズムの初期段階で起こるという研究があり、日本の英語教育の状況は後者であることを考えれば、その可能性が残されていると言える。

それでは第二点のメタ言語能力を身につけさせることが学習者に個別言語の相対性を理解させることにつながるかどうかについてはどうであろうか。まず大津 (1995) のメタ言語能力の定義は、すでに 3 で見た Tunmer & Herrinman (1984) とほぼ同様で、以下のとおりである。

当該言語の母語話者が脳に内蔵している当該言語の知識すなわち文法が内省などによって意識の対象となった場合、その意識を「メタ言語意識 (meta-linguistic awareness) と呼び、メタ言語意識を呼び起こすための能力を「メタ言語能力 (meta-linguistic abilities)」と呼ぶ。

一方、個別言語の相対性については以下のような定義をしている。

自然言語はどれであっても生後一定の期間に一定の言語経験が取り込まれれば獲得可能であり、その点での優劣はないと言う疑う余地もないごく当たり前のことを指している。

そして、メタ言語能力と個別言語の相対性の関係については大津（1995）の以下の部分が参考になると思われる。

中学校段階からは … 外国語も利用して、メタ言語能力の一層の促進をはかる。2つ（以上）の個別言語の窓を用意することによって、言語の本質を立体的に捉えることが可能となる。どの自然言語も生後一定の経験を取り込むことによって誰でも獲得可能であるという点で平等であり、ある個別言語が他の個別言語より優れているということはないという点の理解まで踏み込むことも十分可能である。

確かに、ここで言おうとしていることには賛同できるが、何か釈然としないものが残る。問題は二点あると思われる。第一点は個別言語の相対性の定義にあると思われる。上述のような定義は言語習得に焦点を置いているが、個別言語の相対性とは一般的には（あるいは広義には）、個別言語はそれぞれ固有の一つの世界観の総体を作っているという、フンボルトに基づく思想である。たとえば、自分の母語はあくまでも世界の諸言語の一つにすぎず、他の言語との優劣はない、という意識で、特に習得に限定されたものではない。大津のように習得に限定すると、メタ言語能力と個別言語の相対性の関係の説明は困難になろう。メタ言語能力を養成することから、自然言語の習得可能性における平等性という意識が育つとは考えられない。

第二の問題は、仮に、個別言語の相対性を広義に解釈したとしても、メタ言語能力が個別言語の相対性の理解につながることを説明がやはり不十分な点である。確かに外国語を学び、メタ言語能力を発達させ、母語との比較をすることは有益ではあるが、そこから自然に広義の個別言語の相対性が理解されるとは考えにくい。母語と外国語の比較というと、たとえば、「日本語は主語が省略されることが多いので、英語に比べ、非論理的である」、あるいは逆に「英語はいちいち主語を必要とするので無駄が多い」など、様々な価

値判断がでてくるであろう。したがって、個別言語の相対性については、個別言語の相対性自体が真理かどうかを含めて、意識的に教師が教える他に方法はないと思われる。もしそうだとするなら、個別言語の相対性の理解を英語教育の重要な目的に設定したとして、メタ言語能力を身につけることがそのまま個別言語の相対性の理解につながるとするのはやや論理の飛躍が感じられる。

第三点、すなわち、個別言語の相対性を理解させることが個別文化の相対性を理解させることにつながる、ということについて大津（1995）は以下のように述べている。

個別文化の相対性を理解するための方法はいろいろあろうが、文化を支える重要な基盤である言語の相対性を理解することから始めるという方法がきわめて有効であることは言うをまたないであろう。

この第三点については、上で述べたように、もし個別言語の相対性を広義に解釈した場合は、おおかたは賛同できるがやはり問題点が残る。第一は、メタ言語能力との関係である。第二点で述べたように、メタ言語能力と個別言語の相対性の理解との関係が明らかにされない限り、この第三点の主張からは、大津が最も強調するメタ言語能力の重要性へはつながって行かない。

また、文化の相対性を理解させる場合、言語の相対性を基盤にするのは賛成であるが、言語に限らず、今後ますます異文化に触れる機会がふえることを考えれば、実際の異文化に触れることで、自分の文化を対象化する意識、いわば「メタ文化意識」が育つことが十分考えられる。この意識を基盤としたうえで、個別言語の相対性を教師自ら教える必要があったのと同様に、文化の相対性についても自国の文化を中心に考えるような、いわゆるエスノセントリズムに陥らないような指導を教師側が行なう必要があるだろう。

ただし、やはり問題となるのは、第二点が正しいとしても、上で少し触れ

たように、言語の相対性の考え方が必ずしも確立していないように、文化の相対性も確立した考え方とは必ずしも言えないという点である。文化の相対性とは、すべての文化は固有の価値基準をもっているのだから、文化特性はその文化自身の体系の中でのみ正しく価値づけられる、と一般的に解釈されているが、もし、それぞれの文化に優劣がないとするなら、人間の歴史の中で、文化の接触の結果として価値基準の変化、たとえば男尊女卑などの封建的な考え方から自由平等の精神への変化は、無用だったということになりはしないだろうか。現実に未だに残る不平等の文化を肯定することにならないだろうか。文化の相対性自体に問題が残されていることは否定できない。

以上のように、メタ言語能力の発達促進を英語教育の中心的な目的とする考え方はいくつかの課題や問題点があることを見てきた。大津（1994, 1995）も自ら承知していることだが、このほかにも、彼の提案には以下の二つが問題点として指摘されている。

1. メタ言語能力とは結局の所、意識に上る文法感覚、と言って差し支えないのであるから、その育成を目的にするのは現在のコミュニケーション重視の流れに逆行するものではないか。
2. 究極の目的である文化の相対性の理解は外国語を通さずに社会などの科目の中で母語を行う方が効率的ではないか。

第一点については、本稿の立場、すなわち、運用能力の育成が目的として薄れた場合を想定しての議論であるので、立ち入る必要はないが、あえて言うなら、大津（1995）の言うように、文法感覚は運用能力の育成を促進することがあっても阻害することはないという意見に賛同したい。従来、特に Krashen のインプット理論以来、意識的な文法能力が習得に結びつかないという仮説が一般に受け入れられて、文法軽視の風潮があったが、現在ではやはり文法の重要性が見直されてきている。いまだに意識的な文法能力が習得

に結びつくかどうかの結論はでていないが、大津の論じるように、要は文法偏重が問題であるということになる。

第二点についても、大津（1995）の言うように、個別文化の相対性を理解するための方法はいろいろあろうが、文化を支える重要な基盤である言語の相対性を理解することから始めるという方法がきわめて有効である、というのが正論であろう。あえてつけ加えるとしたら、二言語を比較することによって初めて理解できる文化の違いがいかに多いことを考えれば十分であろう。⁽⁴⁾ また、現在の中学校、高等学校の英語科の学習指導要領の目標自体が異文化理解を重要視していることからこのことは十分に説得力を持つ議論といえる。

ここで大津の目的論についても一言つけ加えるならば、本稿で見たような、メタ言語能力の認知上の良い影響についてはほとんど考慮していない点である。確かに、メタ言語能力が認知上の良い影響があることは今のところは、実証されたわけではないことや、主に、balanced バイリンガルへの影響とされているので日本の外国語教育には当てはまらないかもしれないが、すでに述べたように、外国語の目的論の中で従来から漠然と言われていた知能訓練としての役割を解き明かす研究テーマとしてもっと注目する必要があるのではなかろうか。⁽⁵⁾

6. おわりに

本稿では、バイリンガリズム研究からの知見などを基に、大津（1989, 1994, 1995）による、メタ言語能力促進を英語教育の中心的な目的とする提案について、その可能性と課題について論じてきた。この考え方は現在の英語教育の指導法に関する議論に関連する部分も多い。たとえば、常に批判の対象とされてきている文法訳読法についての再評価の必要性である。また現在の目的論の中の主流といえるコミュニケーションあるいは運用能力全般の向上のためにもメタ言語能力養成が必要であるという議論も増えつつある

(Sharwood Smith, 1994)。さらに、本稿ではあえて議論の中心には置かなかったが、将来翻訳機械の性能が向上し、運用能力の必要性が仮に減少したとしても、バイリンガルあるいはバイカルチャルになること自体に意味があるのかを考える上で、メタ言語能力あるいはメタ文化意識の研究が鍵を握っていると言える。以上の点については今後あらためて論じることにする。

注

- (1) 以上の研究はバイリンガリズムが主に知能発達にあたえる影響を問題にしたものであるが、Genesee, Tucker and Lambert (1975) はバイリンガルがモノリンガルに比べ、コミュニケーションの際に、聞き手の立場により敏感な言語使用をする事を確かめ、バイリンガリズムの良い影響の中に入れていいる。
- (2) このほかにも、Reynolds (1991) による Sternberg (1985, 1988) の知能のモデルを利用した説明があるがそれほど大きな差はないと言える。
- (3) もちろん、このような認識あるいは能力は、バイリンガルに限らず、モノリンガルにも備わるものであるが、バイリンガルの場合には年齢的にモノリンガルに比べて早くから発達することが多くの例からほぼ明らかにされている。そして、この能力は読み書きの発達の重要な要因になると言われている (Donaldson, 1978)
- (4) たとえば、privacy, identity などの本来日本語にない語彙、「建て前」などの英語にない語彙、両言語の意味的なずれなどから両文化の違いが明らかにされる。
- (5) これについては Sharwood Smith (1991) が同様の主張をしている。

参 考 文 献

- Baker, C. 1993. *Foundations of Bilingual Education and Bilingualism*. Cleventon: Multilingual Matters.
- Ben-zeev, S. 1977. The influence of bilingualism on cognitive strategy and cognitive development. *Child Development* 48, 1009-1018.
- Bialystok, E. 1991. *Language Processing in Bilingual Children*. Cambridge University Press.
- Bialystok, E. 1987. Influences of bilingual on metalinguistic development. *Second Language Research* 3 (2), 154-166
- Bialystok, E. 1986. Factors in the growth of linguistic awareness. *Child Development*, 57, 498-510.
- Brigham, C. C. 1923. *A Study of American Intelligence*. Princeton: Princeton University Press..
- Carringer, D. 1974. Creative thinking abilities of a Mexican youth. The relationship of bilingualism. *Journal of Cross-cultural Psychology* 5:

492-504.

- Cummins, J. 1977. Cognitive factors associated with the attainment of intermediate levels of bilingual skills. *Modern Language Journal* 61, 3-12.
- Cummins, J. 1976. The influence of bilingualism on cognitive growth: A synthesis of research findings and explanatory hypotheses. Working Papers on Bilingualism 9, 1-43.
- Cummins, J. 1975. Cognitive factors associated with intermediate levels of bilingual skills. Unpublished manuscript, Educational Research Center, St Patrick's College, Dublin.
- Diaz, R. M. 1985. Bilingual cognitive development: Addressing three gaps in current research. *Child Development* 56, 1376-1388
- Diaz, R. M. & Klingler, C. 1991. Toward an explanatory model of the interaction between bilingualism and cognitive development. In E, Bialystok (ed). *Language Processing in Bilingual Children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Donaldson, M. 1978. *Children's Minds*. Glasgow: Fontana/Collins.
- Genesee, F. Tucker, G. R. and Lambert, W. E. 1975. Communication skills in bilingual children. *Child Development*, 46, 1010-1014.
- Goddard, H. H. 1917. Mental tests and the immigrant. *Journal of Delinquency* 2: 243-77
- Goodenough, F. 1926. Racial differences in the intelligence of school children. *Journal of Experimental Psychology* 9: 338-96
- Hakuta, K. 1987. Degree of bilingualism and cognitive ability in mainland Puerto Rican children. *Child Development*, 58, 1372-1388.
- Hakuta, K. 1986. *The Mirror of Language: the debate on bilingualism*. New York: Basic Books.
- Ianco-Worrall, A. D. 1972. Bilingualism and cognitive development. *Child Development*, 43, 1390-1400
- Jones, W. R. 1959. *Bilingualism and Intelligence*. Cardiff: University of Wales.
- Liedtke, W. W. and L. D. Nelson 1968. Concept formation and bilingualism. *Alberba Journal of Educational Research*, 14, 225-232.
- Leopold, W. F. 1939-1949. *Speech development of a bilinugal child: a linguist's record* (4 vols). Evanston, IL: North Western University Press.
- 大津由紀夫. 1995. 「英語帝国主義」はメタ言語能力によって粉碎できる」『現代英語教育』第31巻第12号
- 大津由紀夫. 1994. 「英語教育の目的」『現代英語教育の諸相』研究社出版。
- 大津由紀夫. 1989. 「メタ言語能力の発達と言語教育—言語心理学からみたことばの習得」『言語』18, 10, 26-34

- Peal, E. & W. Lambert 1962. The relation of bilingualism to intelligence. *Psychological Monographs*, 76, 1-23.
- Reynolds, A. G. 1991. The cognitive consequences of bilingualism. In A. G. Reynolds (ed.) *Bilingualism, Multiculturalism and Second Language Learning*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Romaine, S. 1995. *Bilingualism*. (2nd ed.) Oxford: Basil Blackwell.
- Saer, D. J. 1924. The effect of bilingualism on intelligence. *British Journal of Psychology* 14: 25-38.
- Scott, S. 1973. The relation of divergent thinking to bilingualism: cause or effect? Unpublished manuscript. Department of Psychology, McGill University.
- Sharwood Smith, M. 1991. Language modules and bilingual processing. In E. Bialystok (ed). *Language Processing in Bilingual Children*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sharwood Smith, M. 1994. *Second Language Learning*. Theoretical Foundations. Longman.
- Smith, F. 1923. Bilingualism and mental development. *British Journal of Psychology* 13: 271-82.
- Sternberg, R. J. 1988. *The Triadic Mind: A New Theory of Human Intelligence*. New York: Viking.
- Sternberg, R. J. 1985. *Beyond IQ: A Triadic Theory of Human Intelligence*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tunmer, W. E. & M. L. Herrinman 1984. The development of metalinguistic awareness: A conceptual overview. In W. E. Tunmer, C. Pratt and M. L. Herrinman (eds) *Metalinguistic Awareness in Children*. Berlin Springer-Verlag.